令和7年度　介護福祉科2年

講 義 ・ 演 習 ・ 実 習 概 要

東川国際文化福祉専門学校
介護福祉科

（2年講義概要目次）

	教科目	授業形態	時間数	単位数	必修・選択	期間	P
1	老人福祉論	講義	60	4	必修	通年	1
2	介護の基本Ⅱ	講義	60	4	必修	通年	3
3	地域支援活動Ⅱ	演習	60	2	必修	通年	5
4	コミュニケーションスキル	講義	30	2	必修	前期	6
5	生活支援技術Ⅰ	演習	30	1	必修	前期	8
6	生活支援技術Ⅱ	演習	30	1	必修	前期	11
7	生活支援技術Ⅲ	演習	60	2	必修	通年	13
8	介護過程	演習	120	4	必修	通年	15
9	介護総合演習Ⅱ	演習	60	2	必修	通年	19
10	介護実習Ⅲ	実習	225	5	必修	前期	21
11	介護実習計画						22
12	発達と老化の理解	講義	60	4	必修	通年	25
13	認知症の理解	講義	60	4	必修	通年	27
14	障害者福祉論	演習	60	2	必修	通年	29
15	医学・医療の知識	講義	30	2	必修	前期	31
16	医療的ケアⅠ	講義	40	通年5	必修	前期	32
17	医療的ケアⅡ	演習	30	1	必修	前期	34
18	試験対策講座	講義	30	2	必修	通年	35
19	地域支援活動Ⅰ	演習	30	1	必修	前期	36

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名 老人福祉論	配当学年・時期 2年　前後期	授業形態 講義	時間数（単位数） ６０（４）	授業回数 ３０
担当教員 黒田　英敏	実務経験 有	実務経験の概要 社会福祉協議会在宅福祉課にて8年間社会福祉士、介護支援専門員として高齢者福祉の実務に携わっていた。		

[授業の目的・ねらい]

1．老人福祉の現状と今日的課題について考える
2．老人福祉の理念・目的を理解する
3．現行の老人福祉の体系に至るまでの歴史的経過と意義について理解を深める
4．介護保険制度の現状とその変遷および社会的意義を理解する
5．地域包括的ケアシステムの現状とその変遷および社会的意義を理解する

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

1．高齢者と少子高齢社会の到来
（1）　高齢者の特性について理解するが、はたして年齢、身体状態等固定した定義としてではなく個人差を想定したなかでの高齢者像を各自が各自なりに構築する
（2）　少子高齢社会の到来として、日本における現状を歴史的、国際的な視野で理解する
併せて将来の展望を各自なりに描く

2．高齢者の生活環境の理解
（1）　高齢者の生活環境として　変化する家族の在り方について理解する
（2）　高齢者の経済、就業状況および社会参加の状況について理解する
（3）　高齢者の要介護状態及び介護者の状況について理解する

3．高齢者福祉の歴史と理念について理解する
（1）高齢者福祉の前史である社会福祉の歴史を学ぶ
（2）第二次世界大戦から老人福祉法の誕生と老人福祉法の内容を学ぶ
（3）介護保険制度に至る老人福祉の変遷について学び、介護保険制度の必要性と当時想定されていた内容を学ぶ
（4）介護保険制度の変遷を批判的に学び、諸課題を整理する中で、今後のあるべき方向を自分なりの見解をまとめる

4．介護保険制度についてその内容を詳しく理解する
（1）介護保険法の目的、理念、保険者、被保険者、財源等
（2）要介護認定の仕組みと要介護者像
（3）給付の種類と内容　在宅サービス、施設サービス、地域密着型サービスのそれぞれの必要性と特徴、内容と人員、設備基準と算定構造を学ぶ
（4）予防給付と地域支援事業の変遷について学ぶ
（5）地域包括ケアシステムと地域包括支援センターの役割について理解する

5．高齢者に対する関連諸制度について学ぶ
（1）老人保健制度について学び、今日の地域包括ケアシステムの関連を理解する
（2）高齢者虐待防止法と高齢者虐待の現状について学ぶ
（3）バリアフリー法及び高齢者住まい法について学び高齢者の今後の住まい方について自分なりの意見を整理する

6．高齢者と家族等に対する支援について専門機関、専門職の役割を学ぶ

７．高齢者と地域福祉 （１）高齢者の社会的孤立化を防ぐ （２）地域共生社会づくり （３）福祉コミュニティづくり	
[使用テキスト・参考文献] ①介護福祉士養成講座２　社会の理解 中央法規出版 ②他に独自の資料を配布します	[単位認定の方法及び基準] 期末テストと授業ごとのレポート課題、平常点（学習態度等）を総合し評価する。尚、その配分は５：３：２を基準とする。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
介護の基本Ⅱ	2年　前・後期	講義	60（4）	30
担当教員 硯　明美	実務経験 有	実務経験の概要 障害者支援施設において介護福祉士として介護業務に従事していた		

[授業の目的・ねらい]

・介護を必要とする人およびその生活を理解する。
・フォーマルおよびインフォーマルな支援、地域連携について事例を用いて学びを深める。
・安全の確保のための基礎的知識や事故への対応、介護におけるリスクマネジメントの必要性を理解する。
・多職種協働による介護を実践するために、保健・医療・福祉に関する、他の職種の専門性や役割と機能を理解する。
・介護従事者自身が心身ともに健康に、介護を実践するための健康管理や労働環境の管理を理解する。

[授業終了時の達成課題(到達目標)]

・介護福祉の基本となる理念や地域を基盤とした生活の継続性を支援するしくみを理解し、介護福祉の専門職としての能力と態度を身につける。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

1、第1章　介護福祉を必要とする人の理解
　第１節 私たちの生活の理解
2、　第２節 介護福祉を必要とする人たちの暮らし
3、　演　習 介護福祉を必要とする人たちの暮らし
4、　第３節　「その人らしさ」と「生活ニーズ」の理解
5、　特別演習　昭和の生活を理解しよう②
6、　特別演習　昭和の時代を理解しよう③
7、　特別演習　昭和の時代を理解しよう④
8、　第４節 生活のしづらさの理解とその支援
9、第２章　介護福祉を必要とする人の生活を支えるしくみ
　第１節 利用者の生活を支えるしくみ
10、　第２節 生活を支えるフォーマルサービス（社会的サービス）とは
11、　演　習 生活を支えるフォーマルサービス（社会的サービス）とは
12、　第３節　生活を支えるインフォーマルサービス（私的サービス）とは
13、　演　習 生活を支えるインフォーマルサービス（私的サービス）とは
14、　第４節 地域連携
15、　第４節 地域連携
16、第３章　介護における安全の確保とリスクマネジメント
　第１節 介護における安全の確保

17、　　第２節　リスクマネジメントとは何か

18、　　演　習　身体拘束の廃止について

19、　　第３節　感染症対策

20、第４章　協働する多職種の機能と役割

　　第１節　多職種連携・協働の必要性

21、　　第２節　多職種連携・協働に求められる基本的な能力

22、　　第３節　保険・医療・福祉職の役割と機能

23、　　第３節　保険・医療・福祉職の役割と機能

24、　　第４節　多職種連携・協働の実際

25、　　第４節　多職種連携・協働の実際

26、第５章　介護従事者の安全

　　第１節　健康管理の異議と目的

27、　　第２節　こころの健康管理

28、　　第３節　身体の健康管理

29、　　第４節　労働環境の整備

30、ビデオ学習

試験（ペーパー）

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
介護福祉士養成講座第４巻　介護の基本Ⅱ　第２版 中央法規	①　出席状況・授業への取り組み姿勢　　１０点満点 ②　レポートなどの記録・提出物　　１０点満点 ③　中間・期末のテスト　　８０点満点 ①、②、③を総合して評価する。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名 地域支援活動Ⅱ	配当学年・時期 ２年　前後期	授業形態 演習	時間数（単位数） ６０（2）	授業回数 ３０
担当教員 専任教員	実務経験	実務経験の概要		

[授業の目的・ねらい]

地域における高齢者や障がい者の方々と直接的・主体的なふれあいを通し、地域福祉の実践力を身につける。

[授業全体の内容の概要]

地域生活支援センターを拠点とし、東川町や旭川市の福祉施設に出掛けていき、アクティビティ（「作業療法」「耕生活動」「動物介在療法」「介護予防」）等の地域支援活動を実践する。

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

・地域支援活動の実践から、福祉従事者として必要な地域支援に関わる知識・技術を学び、それを実践できる。
・グループワークを通し、主体性と協調性、チームワークを学び、連携や協働ができる。
・地域支援活動発表会で、2年間の学びをまとめ発表することができる。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

グループに分かれての実践から地域支援を学ぶ
※１クラスを活動グループに分かれて展開する。活動内容により１グループを10名程度で構成し、
それぞれのグループを教員１～２名が担当する。

活動内容（アクティビティ）
以下の様々なアクティビティをとおして地域の方との交流を図り、地域生活を支援する活動を学ぶ。

[グループ活動例]
◎動物介在療法（ポニーの飼育と環境整備）、施設訪問

◎地域の高齢者との交流・ボランティア、作業療法（ドライフラワー）、耕生活動（花栽培・園芸療法）

◎地域福祉のニーズを学ぶ（グループホームの訪問）、作業療法（バルーンアート）

◎地域福祉のニーズを学ぶ（施設訪問）、作業療法（アクティビティ・レクリエーション）
介護予防活動（介護予防体操考案）

※なお、これらの活動のまとめとして、地域支援活動Ⅱにおいては、地域支援活動発表会にて活動を発表する。

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準] 活動成果や活動態度を考慮し、目標達成度によって評価する。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
コミュニケーションスキル	１年後期２年前期	講　　義	６０（４）	３０

担当教員	実務経験	実務経験の概要
大友愛美	有	障害者支援施設（知的障害者）にて７年間ソーシャルワーカーとして勤務したのち障害者生活支援サービス事業所の代表兼ソーシャルワーカーとして１６年間勤務し2010年よりNPO法人ノーマライゼーションサポートセンターこころりんく東川にて副理事長兼障害者相談支援事業所相談員として勤務

[授業の目的・ねらい]

・介護福祉士として必要な、利用者、家族、職員同士でのコミュニケーションの必要性と基本的なコミュニケーション技術の習得を目指す。

・コミュニケーション障害に応じた適切な介護を提供するために、障害特性の理解にもとづいたコミュニケーション技術の習得を目指す。

[授業全体の内容の概要]

・傾聴・共感・受容を軸にコミュニケーションの基本技術を学ぶ

・家族支援の必要性を踏まえたうえでコミュニケーションの基本技術の活用について学ぶ

・障害別にコミュニケーション支援について学ぶ

・チーム支援の必要性と職場で必要なコミュニケーション技術について学ぶ

[授業終了時の達成課題（到達目標）]

・態度に関する基本技術を理解し必要に応じて使えるようになる

・家族支援の必要性を正しく理解する

・コミュニケーション障害と関連する障害特性を理解する

・チームで仕事をする必要性について理解する

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

１．オリエンテーション／コミュニケーションの基本①　介護におけるコミュニケーションとは
２．コミュニケーションの基本②　介護におけるコミュニケーションの対象
３．コミュニケーションの基本技術①　態度に関する基本技術１）傾聴
４．コミュニケーションの基本技術②　態度に関する基本技術２）共感と受容
５．コミュニケーションの基本技術③　態度に関する基本技術３）質問の技法
６．コミュニケーションの基本技術④　言語・非言語・準言語コミュニケーションの基本
７．コミュニケーションの基本技術⑤　目的別のコミュニケーション１）動機づけ
８．コミュニケーションの基本技術⑥　目的別のコミュニケーション２）リフレーミング
９．コミュニケーションの基本技術⑦　目的別のコミュニケーション３）意思決定支援の必要性
１０．コミュニケーションの基本技術⑧　目的別のコミュニケーション４）意思決定支援の実際
１１．コミュニケーションの基本技術⑨　集団におけるコミュニケーション技術
１２．家族とのコミュニケーション①　家族との関係づくり
１３．家族とのコミュニケーション②　家族への助言・指導・調整
１４．家族とのコミュニケーション③　家族関係と介護ストレスへの対応
１５．前半の評価（試験）
１６．特性に応じたコミュニケーション①　コミュニケーション障害への対応の基本
１７．特性に応じたコミュニケーション②　コミュニケーション障害をイメージする
１８．特性に応じたコミュニケーション③　さまざまなコミュニケーション障害　視覚障害・聴覚障害
１９．特性に応じたコミュニケーション④　さまざまなコミュニケーション障害　構音障害
２０．特性に応じたコミュニケーション⑤　さまざまなコミュニケーション障害　失語症
２１．特性に応じたコミュニケーション⑥　さまざまなコミュニケーション障害　認知症
２２．特性に応じたコミュニケーション⑦　さまざまなコミュニケーション障害　精神疾患
２３．特性に応じたコミュニケーション⑧　さまざまなコミュニケーション障害　知的障害・重症心身障害
２４．特性に応じたコミュニケーション⑨　さまざまなコミュニケーション障害　発達障害
２５．特性に応じたコミュニケーション⑩　さまざまなコミュニケーション障害　高次脳機能障害
２６．チームのコミュニケーション①　報告・連絡・相談の技術

２７．チームのコミュニケーション②　記録の技術 ２８．チームのコミュニケーション③　会議・議事進行・説明の技術 ２９．チームのコミュニケーション④　事例検討に関する技術 ３０．チームのコミュニケーション⑤　情報の活用と管理のための技術	
[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座　コミュニケーション技術 中央法規	[単位認定の方法及び基準] 授業ごとに提出する課題10% 中間試験と期末試験の合計90% １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
生活支援技術Ⅰ	1年　前後期・2年　前期	演習	１５０（５）	７５

担当教員	実務経験	実務経験の概要
硯　明美	有	硯：障害者支援施設において介護福祉士として介護業務に従事していた。
石﨑　美幸	有	石﨑：看護師として、病院及び地域クリニックで看護業務及び在宅医療に携わっていた。
長井　瑞希	有	長井：認知症対応型共同生活介護で、介護福祉士として介護業務に従事していた。
伊藤　義晃	有	伊藤：高齢者福祉施設において介護福祉士として、介護業務・相談援助業務に従事していた。
平田　留美	有	平田：看護師として、病院で看護業務に携わっていた。
谷口　公一	有	谷口：障碍者・高齢者福祉施設において介護福祉士として、介護業務・相談援助業務に従事していた

[授業の目的・ねらい]

・尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識、技術を習得する。

[授業全体の内容の概要]

・介護福祉士が行う生活支援の意義と目的、ICFの視点、利用者の生活を多角的に支えるためのチームアプローチのあり方を学ぶ。
・住まいの役割と機能、加齢と生活空間、快適な室内環境のあり方などを学ぶ。
・あらゆる生活行為の基本となる「移動」について、自立した移動の一連の流れを理解したうえで、移動・移乗における具体的な介護技術を学ぶ。
・生活支援における福祉用具の重要性、適切な福祉用具を選ぶための視点などを学ぶ。
・調理、洗濯、裁縫などの具体的な家事支援における介護技術を学ぶ。

[授業終了時の達成課題(到達目標)]

・生活支援技術の原理を理解し、その技術を習得する。
・生活支援技術に適した環境について学ぶ。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

1　オリエンテーション　生活支援技術を学ぶ心得・実習室の使い方
2　生活支援の理解　生活支援の基本的な考え方　生活支援と介護過程　生活支援とチームアプローチ
3　住宅環境の整備　住まいの役割と機能　生活空間　快適な室内環境　安全に暮らすための生活環境
4　住宅環境の整備　高齢者・障害者の住まい　居住環境の整備における多職種との連携
5　福祉用具の意義　生活支援における福祉用具の重要性
6　福祉用具の意義　福祉用具の種類
7　福祉用具の意義　適切な福祉用具を選ぶための視点
8　自立に向けた家事の介護　自立した家事とは
9　自立に向けた家事の介護　自立した家事とは
10　自立に向けた家事の介護　自立に向けた家事の介護
11　自立に向けた家事の介護　自立に向けた家事の介護
12　自立に向けた家事の介護　自立に向けた家事の介護
13　自立に向けた家事の介護　自立に向けた家事の介護
14　自立に向けた家事の介護　自立に向けた家事の介護
15　自立に向けた家事の介護　家事の介護における多職種との連携
16　災害時における生活支援　被災地で活躍する際の心構え　災害時における生活支援
17　振り返り
18　自立に向けた移動の介護　体位と移動　ボディメカニクスについての理解　体位の名称

19　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　体位変換（水平移動・仰臥位・側臥位）
20　自立に向けた移動の介護　振り返り　体位変換
21　自立に向けた移動の介護　振り返り　体位変換
22　自立に向けた移動の介護　体位と移動　車いすの種類と名称　散歩時の観察と注意点
23　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　基本的な車いすの操作方法
24　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　ティルトリクライニング車いす、その他車いすの操作方法
25　自立に向けた移動の介護　体位と移動　歩行介助　歩行動作のメカニズム　杖の種類
26　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　歩行介助
27　自立に向けた移動の介護　振り返り
28　自立に向けた移動の介護　振り返り
29　自立に向けた移動の介護　振り返り
30　自立に向けた移動の介護　第一期実習の振り返り
31　自立に向けた移動の介護　第一期実習の振り返り
32　自立に向けた移動の介護　第一期実習の振り返り
33　自立に向けた移動の介護　体位と移動　同一体位の障害　体位変換の必要性
34　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　仰臥位から端座位
35　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　全介助の移動　引き上げ介助
36　自立に向けた移動の介護　排泄介助　排泄自立のための福祉用具
37　自立に向けた移動の介護　排泄介助　排泄に関する福祉用具（紙おむつ・パッドの吸収率について）
38　自立に向けた移動の介護　排泄介助　排泄に関する福祉用具（紙おむつ・パッドの吸収率について）
39　自立に向けた移動の介護　排泄介助　排泄に関する福祉用具（紙おむつ・パッドの吸収率について）
40　自立に向けた移動の介護　第二期実習の振り返り
41　自立に向けた移動の介護　第二期実習の振り返り
42　自立に向けた移動の介護　第二期実習の振り返り
43　自立に向けた移動の介護　振り返り
44　自立に向けた移動の介護　振り返り
45　自立に向けた移動の介護　振り返り
46　自立に向けた移動の介護　２年次　オリエンテーション
47　自立に向けた移動の介護　２年次　オリエンテーション
48　自立に向けた移動の介護　着脱の介助　自立支援に向けた着脱の福祉用具の活用
49　自立に向けた移動の介護　体位と移動　褥瘡のメカニズム
50　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　安楽な体位の実際（仰臥位・側臥位）尖足予防
51　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　安楽な体位の実際（仰臥位・側臥位）尖足予防
52　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　安楽な体位の実際（仰臥位・側臥位）尖足予防
53　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　安楽な体位の実際
54　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　在宅での体位変換
55　自立に向けた移動の介護　体位と移動　動作別に見た福祉用具　演習　リフトを使った移動・移乗
56　自立に向けた移動の介護　体位と移動　動作別に見た福祉用具　演習　スライディングボード・シート
57　自立に向けた移動の介護　食事介助　与薬についての基礎知識
58　自立に向けた移動の介護　体位と移動　車いすによる社会生活の維持・拡大の技法
59　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　車いすで街を体験する学外学習の計画
60　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　車いすで街を体験する学外学習の計画
61　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　車いすで街を体験する学外学習の実施
62　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　車いすで街を体験する学外学習の実施
63　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　車いすで街を体験する学外学習の実施
64　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　車いすで街を体験する学外学習のまとめ
65　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　車いすで街を体験する学外学習のまとめ
66　自立に向けた移動の介護　体位と移動　演習　車いすで街を体験する学外学習のまとめ
67　自立に向けた移動の介護　第三期実習の振り返り
68　自立に向けた移動の介護　第三期実習の振り返り
69　自立に向けた移動の介護　第三期実習の振り返り

70　自立に向けた移動の介護　排泄介助　自然排泄への援助（排泄困難・便秘・下痢・失禁） 71　自立に向けた移動の介護　排泄介助　自然排泄への援助（排泄困難・便秘・下痢・失禁） 72　自立に向けた移動の介護　緊急時の介護　事故者発見時の観察と応急手当　演習　応急手当 73　自立に向けた移動の介護　緊急時の介護　事故者発見時の観察と応急手当　演習　包帯の巻き方 74　自立に向けた移動の介護　振り返り 75　自立に向けた移動の介護　振り返り 試験（ペーパーテスト・実技テスト）	
[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座第６巻　生活支援技術Ⅰ 介護福祉士養成講座第７巻　生活支援技術Ⅱ 介護福祉士養成講座第８巻　生活支援技術Ⅲ 中央法規	[単位認定の方法及び基準] 各学期末の試験（実技試験・ペーパー試験）、各単元のレポート課題、平常点（出席点、演習態度等）を総合し評価する。尚、その配分は７：２：１を基準とする。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
生活支援技術Ⅱ	1年　前後期・2年前期	演習	９０（３）	４５

担当教員	実務経験	実務経験の概要
硯　明美	有	硯：　障害者支援施設において介護福祉士として介護業務に従事していた。
石﨑　美幸	有	石﨑：看護師として、病院及び地域クリニックで看護業務及び在宅医療に携わっていた。
長井　瑞希	有	長井：認知症対応型共同生活介護で、介護福祉士として介護業務に従事していた。
伊藤　義晃	有	伊藤：高齢者福祉施設において介護福祉士として、介護業務・相談援助業務に従事していた。
神戸 結花	有	神戸：高齢者福祉において介護福祉士として介護業務に従事していた。

[授業の目的・ねらい]

・尊厳の保持や自立支援、生活の豊かさの観点から、本人主体の生活が継続できるよう、根拠に基づいた介護実践を行うための知識、技術を習得する。

[授業全体の内容の概要]

・自立した身じたくの一連の流れを理解したうえで、利用者の状態に応じた身じたくの介助の方法を学ぶ。
・介護の基本原則にのっとった食事の介護、利用者の状態に応じた食事の介助、誤嚥の予防のための支援、食後の口腔ケアなどを学ぶ。
・自立した入浴の一連の流れを理解したうえで、具体的な入浴と清潔保持の介助方法を学ぶ。
・トイレやポータブルトイレでの排泄の介助方法、自立でのパッド交換、オムツを使用した排泄の介助などを学ぶ。
・休息・睡眠状況を整えるためのベッドメイキングの方法を学ぶ。
・人生の最終段階におけるケアの意味や死をむかえる人の介護、亡くなったあとの介護を学ぶ。
・外傷や骨折、窒息などの際に、どのように応急手当や緊急時対応を行えば良いか学ぶ。

[授業終了時の達成課題(到達目標)]

・生活支援技術の原理を理解し、その技術を習得する。
・生活支援技術に適した環境について学ぶ。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

1　休息・睡眠の介護　演習　ベッドメイキング
2　休息・睡眠の介護　演習　ベッドメイキング
3　休息・睡眠の介護　演習　ベッドメイキング
4　休息・睡眠の介護　演習　ベッドメイキング
5　休息・睡眠の介護　演習　ベッドメイキング
6　自立に向けた食事の介護　演習　コミュニケーション
7　自立に向けた食事の介護　演習　ベッド上での食事の場面のコミュニケーション
8　自立に向けた食事の介護　演習　ベッド上での食事の場面のコミュニケーション
9　自立に向けた身じたくの介護　演習　片麻痺者に対する、ベッド上でのパジャマの交換
10　自立に向けた身じたくの介護　演習　片麻痺者に対する、座位でのパジャマの交換
11　自立に向けた身じたくの介護　演習　片麻痺者に対する、靴下の介助
12　自立に向けた食事の介護　演習　座位での食事介助
13　自立に向けた排泄の介護　排泄介助の基礎知識
14　自立に向けた排泄の介護　演習　紙おむつ・パッドの交換
15　自立に向けた排泄の介護　演習　紙おむつ・パッドの交換
16　自立に向けた排泄の介護　演習　片麻痺者へのトイレの一部介助
17　自立に向けた排泄の介護　演習　片麻痺者へのトイレの一部介助
18　自立に向けた排泄の介護　演習　布オムツの交換

19　自立に向けた排泄の介護　演習　便器・尿器・差し込み便器の介助
20　自立に向けた排泄の介護　演習　ポータブルトイレの介助　トイレの全介助
21　振り返り
22　振り返り
23　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　機械浴による入浴介助の方法
24　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　機械浴による入浴介助の方法
25　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　機械浴による入浴介助の方法
26　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　家庭浴による入浴介助の方法
27　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　家庭浴による入浴介助の方法
28　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　家庭浴による入浴介助の方法
29　休息・睡眠の介護　演習　利用者が寝たままでのシーツの交換
30　休息・睡眠の介護　演習　利用者が寝たままでのシーツの交換
31　自立に向けた身じたくの介護　演習　浴衣の交換
32　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　頭皮の清潔保持の方法
33　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　頭皮の清潔保持の方法
34　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　部分的な清潔保持　爪・髭・耳・鼻
35　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　部分的な清潔保持　爪・髭・耳・鼻
36　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　口腔の清潔　清潔保持の目的　義歯の手入れ
37　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　歯磨き　うがい
38　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　歯磨き　うがい
39　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　部部的な清潔保持　手浴
40　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　部分的な清潔保持　足浴
41　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　部分的な清潔保持　目
42　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　全身清拭
43　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　全身清拭
44　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　振り返り
45　自立に向けた入浴・清潔保持の介護　演習　振り返り
試験（ペーパーテスト・実技テスト）

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
介護福祉士養成講座第６巻　生活支援技術Ⅰ 介護福祉士養成講座第７巻　生活支援技術Ⅱ 介護福祉士養成講座第８巻　生活支援技術Ⅲ 中央法規	各学期末の試験（実技試験・ペーパー試験）、各単元のレポート課題、平常点（出席点、演習態度等）を総合し評価する。尚、その配分は７：２：１を基準とする。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名 生活支援技術Ⅲ	配当学年・時期 ２年前後期	授業形態 演習	時間数（単位数） ６０（2）	授業回数 ３０
担当教員	実務経験	実務経験の概要		
硯　明美	有	硯：障害者支援施設において介護福祉士として介護業務に従事していた。		
石﨑　美幸	有	石﨑：看護師として、病院及び地域クリニックで看護業務及び在宅医療に携わっていた。		
長井　瑞希	有	長井：認知症対応型共同生活介護で、介護福祉士として介護業務に従事していた。		
伊藤　義晃	有	伊藤：高齢者福祉施設において介護福祉士として、介護業務・相談援助業務に従事していた。		
平田　留美	有	平田：看護師として、病院で看護業務に携わっていた。		
谷口　公一	有	谷口：障碍者・高齢者福祉施設において介護福祉士として、介護業務・相談援助業務に従事していた		

[授業の目的・ねらい]

・①障害や疾病のある人について、医学的・心理的側面から理解する
・②生活上の困りごとを理解する
・③障害や疾病のある人への生活支援において、介護福祉士が果たすべき役割を理解する

[授業全体の内容の概要]

・高齢者・視覚障害・運動機能障害・内部障害・高次脳機能障害・重複障害等の各障害の基本的な知識、障害や疾病により起こる生活上の困りごと、それに対する介護福祉士の関わりについて学ぶ。

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

・様々な障害を持つ方への理解を深める。
・利用者の状態・状況に応じた介護を実践することができる。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

1　高齢者・障害者のコミュニケーション　（高齢者　認知症　視覚障害者　失語症　構音障害　老人性難聴）
2　高齢者・障害者のコミュニケーション　（高齢者　認知症　視覚障害者　失語症　構音障害　老人性難聴）
3　障害別の食事介助の基本
4　高齢者の食事の献立について考える
5　高齢者の食事の環境について考える
6　状態に応じた食事介助　臥床者
7　状態に応じた食事介助　臥床者
8　状態に応じた食事介助　視覚障害者
9　状態に応じた食事介助　視覚障害者
10　運動機能障害に応じた介護　高次脳機能障害・脳血管障害
11　運動機能障害に応じた介護　脳性麻痺・四肢欠損・四肢切断・脊髄損傷
12　運動機能障害に応じた介護　パーキンソン病・悪性関節リュウマチ・筋ジストロフィー・筋萎縮性側索硬化症・脊髄小脳変性症
13　内部障害に応じた介護　心臓機能障害　呼吸機能障害
14　内部障害に応じた介護　腎機能障害　小腸機能障害
15　内部障害に応じた介護　後天性免疫不全症候群（HIV）　肝機能障害
16　内部障害に応じた介護　膀胱・直腸障害
17　状態に応じた介護　事例学習
18　状態に応じた介護　事例学習
19　状態に応じた介護　事例学習

20　状態に応じた介護　事例学習 21　状態に応じた介護　事例学習 22　状態に応じた介護　事例学習 23　状態に応じた介護　事例学習 24　状態に応じた介護　事例学習 25　状態に応じた介護　事例学習 26　状態に応じた介護　事例学習 27　状態に応じた介護　事例学習 28　状態に応じた介護　事例学習護 29　振り返り 30　振り返り 　試験（ペーパーテスト・実技テスト）	
[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座第６巻　生活支援技術Ⅰ 介護福祉士養成講座第７巻　生活支援技術Ⅱ 介護福祉士養成講座第８巻　生活支援技術Ⅲ 中央法規	[単位認定の方法及び基準] 各学期末の試験（実技試験・ペーパー試験）、各単元のレポート課題、平常点（出席点、演習態度等）を総合し評価する。尚、その配分は７：２：１を基準とする。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授業概要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
介護過程	１年後期・２年前期後期	演習	１５０時間（５単位）	７５（１年生で１５回 ２年生で６０回）
担当教員 黒田英敏	実務経験 有	実務経験の概要 黒田：社会福祉協議会在宅福祉課にて8年間社会福祉士、介護支援専門員として高齢者福祉の実務に携わっていた。		

[授業の目的・ねらい]

「介護過程」は**利用者の方にもっともふさわしい介護**を行うための学習です。そのためには利用者の方を①「よく理解すること」です。②利用者の方の「思い」を受けとめ、「願い」が叶えられる「介護の計画」を作ります。③その「介護計画」にもとづいて介護させていただきます。さらにもっと利用者の方がよろこばれ、「これこそ私の（望む）介護です」と仰る介護に手直しします。この過程（プロセス）が「介護過程」です。

[授業全体の内容の概要]

１年生で介護過程の意義と内容を学習します。第２期介護実習で学習を深めます。

２年生では実際に実習先で「介護過程」を行います。

実習で展開した「介護計画」を学校に持ち帰り、さらにクラスメイトと検討を重ねます。「介護過程」の学習のまとめは、「卒業演習発表会」で介護福祉科全員で検討し「卒業演習記録集」にまとめます。

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

・介護過程の意義を理解して、展開（情報を集める　計画を作ったり　実施したり　評価したりすること）を実践（実際に行うことが）できる

・介護過程の展開においてチームで協働（意見を伝え合ったり、検討したり、共に介護サービスを行ったり）できる

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

１年次

1　オリエンテーション　大切な介護過程

2　介護過程の４つの内容（①情報を集める　②計画する　③実施する　④評価する）

3　介護過程と介護実習（実習の中で学ぶ介護過程）

4　介護過程①情報を集めてみよう　アセスメント

5　アセスメントは「観察」

6　アセスメントは利用者のかたを思うこと　「想像力は創造力」

7　どの情報が大切？　情報の整理と情報から分かること

８　介護に必要な「情報」と情報の意味

９　先輩の介護計画から学ぼう①　情報の集め方

１０　先輩の介護計画から学ぼう②　介護の課題と目標

１１　先輩の介護計画から学ぼう③　介護計画

１２　先輩の介護計画から学ぼう④　利用者の方によろこばれる介護を計画しよう

１３　実習で介護過程を学ぼう①

１４　実習で介護過程を学ぼう②

１５　１年生のまとめ　２年生の介護過程について

２年次で実施

１６　オリエンテーション　介護過程の４つの内容（①情報を集める　②計画する　③実施する　④評価する）

１７　①情報を集める　アセスメントのプロセスを理解する

１８　①アセスメントで集める情報はどんな内容か

１９　①アセスメントするためのツール「利用者理解」を使ってみる　基本情報の書き方、集め方

２０　①アセスメントするためのツール「利用者理解」を使ってみる　基本情報の書き方、集め方

２１　①アセスメントするためのツール「利用者理解」を使ってみる　３０項目とＩＣＦ

２２　①アセスメントするためのツール「利用者理解」を使ってみる　３０項目とＩＣＦ

２３　①アセスメントするためのツール「利用者理解」を使ってみる　３０項目とＩＣＦ

２４　①アセスメントするためのツール「この人こんな人」シートを使ってみる

～　集めた情報でその人の全体を理解する　～

２５　①アセスメントするためのツール「この人こんな人」シートを使ってみる

～　集めた情報でその人の全体を理解する　～

２６　②利用者の方の課題を見つけよう　その方の課題ってなに？　課題は問題ではありません

２７　②利用者の方の課題を見つけよう　課題分析シートの使い方

２８　②利用者の方の課題を見つけよう　課題分析シートでの演習

２９　②利用者の方の課題を見つけよう　課題分析シートでの演習

３０　②介護計画の目標を考えよう　目標ってなに？

３１　②長期目標と短期目標

３２　②長期目標と短期目標

３３　②さあ、いよいよ「具体的な支援内容」を考えよう

３４　②「具体的な支援内容」の書き方、考え方

３５　②「具体的な支援内容」の書き方、考え方

３６　③「介護計画」を実施する準備と方法

３７　③「介護計画」を実施する準備と方法

３８　④「介護計画」を実施した後に　見直しと評価

３９　第３期介護実習で介護過程を展開しよう

４０　第３期介護実習での介護過程の準備　スケジュールの理解とツールの理解

４１　第３期介護実習での介護過程の準備　ツールの理解と演習

４２　第３期介護実習での介護過程の準備　ツールの理解と演習

４３　実習後の記録の整理①　アセスメントシートの整理

４４　実習後の記録の整理②　情報の整理と分析　集めた情報の意味を調べる

４５　実習後の記録の整理②　情報の整理と分析　医療情報、介護情報を調べる

４６　実習後の記録の整理②　情報の整理と分析　医療情報、介護情報を調べる

４７　卒業演習　小グループに分かれて「事例紹介」を検討する　まず対象者の方を「紹介」する

４８　卒業演習　小グループの検討　対象者の方の入所までの生活歴を「紹介」する

４９　卒業演習　小グループの検討　対象者の方の入所後の生活状況を「紹介」する

５０　卒業演習　小グループの検討　対象者の方の「事例紹介」を検討する

５１　卒業演習　小グループの検討　クラスメイトの対象者の方の「事例紹介」を検討する

５２　卒業演習　小グループの検討　クラスメイトの対象者の方の「事例紹介」を検討する

５３　卒業演習　大グループでの検討　対象者の方の「事例紹介」を検討する

５４　卒業演習　大グループでの検討　対象者の方の「課題」を検討する

５５　卒業演習　大グループでの検討　対象者の方の「目標と援助内容」を検討する

５６　卒業演習　大グループでの検討　クラスメイトの「介護計画」を検討する

５７　卒業演習　大グループでの検討　クラスメイトの「介護計画」を検討する

５８　卒業演習　大グループでの検討　クラスメイトの「介護計画」を検討する

５９　卒業演習　大グループでの検討　クラスメイトの「介護計画」を検討する

６０　卒業演習　大グループでの検討　クラスメイトの「介護計画」を検討する

６１　卒業演習発表会の発表原稿をワープロ入力する

６２　卒業演習発表会の発表原稿をワープロ入力する

６３　卒業演習発表会をクラス全員で準備する

６４　卒業演習発表会をクラス全員で準備する

６５　卒業演習発表会でクラス全員の「介護計画」を検討する

６６　卒業演習発表会でクラス全員の「介護計画」を検討する

６７　卒業演習発表会でクラス全員の「介護計画」を検討する

６８　卒業演習発表会でクラス全員の「介護計画」を検討する

６９　卒業演習発表会でクラス全員の「介護計画」を検討する

７０　卒業演習発表会でクラス全員の「介護計画」を検討する

７１　「介護計画」を練り直す（再検討）個人

７２　「介護計画」を練り直す（再検討）個人

７３　「介護計画」を練り直す（再検討）大グループ

７４　「介護計画」を練り直す（再検討）大グループ

７５　卒業演習記録集の原稿が完成する

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
介護福祉士養成講座第９巻　介護過程 中央法規	平常点（演習態度等）と、提出課題の内容を総合し評価する。尚、その配分は６：４を基準とする。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名 介護総合演習Ⅱ	配当学年・時期 ２年　通年	授業形態 演習	時間数（単位数） ６０（２）	授業回数 ３０
担当教員 黒田　英敏 伊藤　義晃 長井　瑞希 硯　　明美 石﨑　美幸 平間　千絵 平田　留美 谷口　公一	実務経験 有 有 有 有 有 無 有 有	実務経験の概要 黒田：社会福祉協議会在宅福祉課にて社会福祉士、介護支援専門員として高齢者福祉の実務に携わっていた。 伊藤：介護老人福祉施設において介護福祉士として、介護業務と相談援助業務に携わっていた。 長井：認知症対応型共同生活介護で、介護福祉士として介護業務に従事していた。 硯　：障害者支援施設において介護福祉士として介護業務に従事していた。 石﨑：看護師として看護業務や手術室看護、地域のクリニックにて外来業務及び在宅医療に携わっていた。 平田：看護師として病院及びクリニックの病棟、外来、手術室で看護業務に携わっていた。 谷口：障害者・高齢者福祉施設において介護福祉士として、介護業務・相談援助業務に従事していた。		

[授業の目的・ねらい]

・実習施設の役割・機能の理解。施設利用者の生活のニーズの理解。
・実習Ⅱで介護過程を展開できるよう一連の流れと目的を理解する。

[授業全体の内容の概要]

・介護実習Ⅰにおいて明確化した課題の改善に向け、校内学習との統合を図りながら介護福祉士に必要な知識・技術の向上を目指した授業を展開する。
・実習Ⅱの介護過程の展開の事前学習

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

・介護実習における介護過程を展開できる。
・職員・利用者の方の情報収集に必要な基本的なコミュニケーション方法を身につける。
・実習イメージを膨らませ、自身の目標や学習課題を言語化・明確化できる。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

1　実習事前指導①　介護実習Ⅱにむけて（実習の希望調査、身上書の記入）
2　実習事前指導②　介護実習Ⅱにむけて（実習日誌の書き方、カンファレンス）
3　実習事前指導③　個人目標
4　実習事前指導④
5　実習事前指導⑤　実習配属の発表、グループ目標、施設概要の記入
6　実習事前指導⑥　施設への電話がけ
7　実習事前指導⑦　事前訪問指導
8　実習事前指導⑧　事前訪問報告書
9　実習事前指導⑨　実習前の身だしなみのチェック
10　実習事前指導⑩　実習壮行会
11　実習事後指導①　礼状
12　実習事後指導②　実習のまとめ
13　実習事後指導③　実習のまとめ
14　実習事後指導④　実習のまとめの報告
15　実習のまとめ①　実習報告会の準備・グループワーク①
16　実習のまとめ②　実習報告会の準備・グループワーク②
17　実習のまとめ③　実習報告会の準備・グループワーク③
18　実習のまとめ④　実習報告会の準備・グループワーク④
19　実習のまとめ⑤　実習報告会の準備・グループワーク⑤
20　実習のまとめ⑥　実習報告会の準備・グループワーク⑥

コマ数	
21	実習報告会①　発表・運営
22	実習報告会②　発表・運営
23	実習報告会③　発表・運営
24	実習報告会④　発表・運営
25	報告内容再検討・グループワーク①
26	報告内容再検討・グループワーク②
27	報告内容再検討・グループワーク③
28	報告内容再検討・グループワーク④
29	報告内容再検討・グループワーク⑤
30	報告内容再検討・グループワーク⑥

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
中央法規　介護福祉士養成講座１０ 介護総合演習・介護実習	平常点（出席点、演習態度）と、提出物を総合し評価する。尚、その配分は６：４を基準とする。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
介護実習Ⅲ	2年　前期	実習	Ⅲ　２２５（5）	

担当教員	実務経験	実務経験の概要
黒田　英敏	有	黒田：社会福祉協議会在宅福祉課にて社会福祉士、介護支援専門員として高齢者福祉の実務に携わっていた。
伊藤　義晃	有	伊藤：介護老人福祉施設において介護福祉士として、介護業務と相談援助業務に従事していた。
石﨑　美幸	有	硯　：障害者支援施設において介護福祉士として介護業務に従事していた。
硯　　明美	有	石﨑：看護師として、訪問看護ステーション、認知症対応型共同生活介護などの在宅サービスの実践に携わっていた。
長井　瑞希	有	長井：認知症対応型共同生活介護で、介護福祉士として介護業務に従事していた。
平間　千絵	無	平田：看護師として病院及びクリニックの病棟、外来、手術室で看護業務に携わっていた。
平田　留美	有	

[授業の目的・ねらい]

○介護実習Ⅱにおいては個別ケアを行うために個々の生活リズムや個性を理解し、利用者の課題を明確にするための利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を総合して具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得する。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

別紙　旭川福祉専門学校介護実習計画に基づき実施する

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
介護福祉士養成講座　第１０巻 介護総合演習・介護実習　第2版 中央法規	実習時間の８割の出席と実習評価に、実習態度を考慮し評価する。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

東川国際文化福祉専門学校介護福祉科

令和７年度介護実習計画

「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正（平成 19 年 12 月 5 日）による、介護福祉士養成課程カリキュラムに則った介護実習を行う。このうち令和７年度に実施する実習は、令和７年度入学生については、見学実習、第一期介護実習（介護実習Ⅰ－①）、第二期介護実習（介護実習Ⅰ－②）を行い、令和６年度入学生は第三期介護実習（介護実習Ⅱ）を実施する。

令和７年度の実施日程は下記のとおり行う。

	実習の種類	実習期間	日数	備考
令和7年度入学生	見学実習	令和７年５月８日(木) ～5 月 13 日(火)	4 日間	各福祉施設
	第一期介護実習	令和７年８月 25 日(月) ～9 月 6 日(土)	12 日間 (90 時間)	実習Ⅰ－①
	第二期介護実習	令和７年 12 月１日(月) ～12 月 20 日(土)	18 日間 (135 時間)	実習Ⅰ－②
令和6年度入学生	第三期介護実習	令和７年６月９日(月) ～7 月 12 日(土)	30 日間 (225 時間)	介護実習Ⅱ

A　介護実習

１．介護実習の目的

(1)利用者の生活の場である多様な介護現場において、個々の利用者の生活リズムや個性を理解した上で個別ケアを理解し、利用者及び家族との関わりを通じたコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じたチームの一員としての介護福祉士の役割について理解する。（介護実習Ⅰ）

(2)１つの施設・事業者において一定期間以上継続して実習を行う中で、利用者の課題を明確にするための利用者ごとの介護計画の作成、実施、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開し、他の科目で学習した知識及び技術等を総合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を修得する。（介護実習Ⅱ）

上記の目的のため介護実習Ⅰと介護実習Ⅱに区分して実施する。

２．介護実習の内容

(1)実習の内容及び指導方針は文部科学省高等教育局長・厚生労働省社会・援護局長連名通知（平成20年3月28日　19文科高第918号・社援発第0328002号）に沿って行う。なお、本校では介護実習Ⅰをさらに Ⅰ-①、Ⅰ-②に区分し、介護実習Ⅰ-①、介護実習Ⅰ-②、介護実習Ⅱの3段階に分けて行う。

(2)第一段階（介護実習Ⅰ-①）

人間関係を形成しながら慣れ親しんだ伝統や文化のある地域社会で暮らす高齢者や障害のある人が、施設等の利用に際しても、その人らしさを維持しながら生活する状況について理解する。また、その生活を継続させるためには何が必要なのかという個別ケアの実践の重要性を通して学習する。また実習施設・事業等の実際を体験し、施設等の機能や基本的なケアを学ぶ。

(3)第二段階（介護実習Ⅰ-②）

次の 第三段階（介護実習Ⅱ）での介護実践のための基本的な生活支援技術を実践し、利用者の状況に応じた介護技術を適切に使う必要があることを学習する。さらに、実際に施設や事業所のカンファレンス等に参加し、介護をする上で必要な他の職種の役割について学ぶことで、生活支援チームの一員としての介護福祉士の役割について理解する。

(4)第三段階（介護実習Ⅱ）

「介護過程」で学んだ思考のプロセスを実際の利用者を受け持つことにより実践する。その際には、個々の利用者の生活背景や生活リズムを理解し、必要な情報を収集し、自立支援の観点から実際の場面での介護過程の展開能力を育成する。その際には利用者や実習指導者を始め介護職員と相談しながら、立案した介護計画に基づいた介護を提供し、自ら行った介護実践の評価や計画の修正が行えるようにする。

３．介護実習を行う施設・事業等及び方法等

(1)介護実習を行う施設・事業等（以下「介護実習施設等」）は、昭和62年厚生省告示第203 号の定めにより、特定の施設・事業等の種別に片寄ることなく各種施設及び居宅サービスにて行う。

(2)第一段階（介護実習Ⅰ-①）を行う介護実習施設等の種別は、多様な介護サービスを理解するといった実習の目的を考え、高齢者介護の実習施設等として訪問介護（ホームヘルプサービス)、通所介護(デイサービス)、認知症対応型共同生活介護(グループホーム)、小規模多機能型居宅介護、養護老人ホームに、また障害者介護の実習施設として障がい者支援施設にお願いする。

第一段階の介護実習は2週間で2～4種別の介護実習施設等にて実習し、実習形態は住込実習または通勤実習とする。

第二段階（介護実習Ⅰ-②）を行う介護実習施設等の種別は、介護技術の確認や多職種協働、関係機関との連携といった目的から、高齢者介護の実習施設等として特別養護老人ホーム、介護老人保健施設に、また障がい児者介護の実習施設として重症心身障害児者施設、

障がい者支援施設にお願いする。

第二段階の介護実習は1施設において3週間実習し、実習形態は住込実習または通勤実習とする。

第三段階（介護実習Ⅱ）を行う介護実習施設等の種別は、介護計画の作成、実施、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった介護過程を展開する目的から、高齢者介護の実習施設等として特別養護老人ホーム、介護老人保健施設に、また障がい児者介護の実習施設として重症心身障害児者施設、障がい者支援施設にお願いする。

第三段階の介護実習は1施設において5週間実習し、実習形態は住込実習または通勤実習とする。

(3)実習施設の地域は、週1回以上の巡回指導が可能な範囲とする。

4．介護実習を行う時期と期間

(1)介護実習の総合計時間は450時間（10週）とする。

(2)第1学年前期に事前実習として介護実習施設を含め各種福祉施設の見学実習を行う。

(3)実習の時期は三段階の実習内容に対応すべく、三期にわたって実施する。第一期は、第一段階に対応するもので、第1学年次に行う。第二期は、第二段階に対応するもので、第1学年次に行う。第三期は、第三段階に対応するもので、第2学年次に行う。

B．実習指導・巡回指導

1．実習に必要な事項の指導は、教科目「介護総合演習」の時間に行う。

2．実習期間中は、教職員が定期的に巡回指導にあたる。

2、実習生について

令和7年度実習生の概要は下記のとおりであります。

介護福祉科2年生（33期生）　45名

うち、外国人留学生　21名

介護福祉科1年生（34期生）　名

うち、外国人留学生　名

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名 発達と老化の理解	配当学年・時期 2年　前後期	授業形態 講義	時間数（単位数） ６０（４）	授業回数 ３０
担当教員 平間　千絵 平田　留美	実務経験 有 有	実務経験の概要 平間：精神神経科で臨床心理士として5年間の心理業務及び、本校学生相談室における心理相談業務に従事している。 平田：看護師として、病院及びクリニックの病棟、外来、手術室で看護業務携わっていた。		

[授業の目的・ねらい]

人間の加齢に伴う身体の発達と新たな可能性の広がりという意味を含む老化について学ぶ。さらに高齢者にかかりやすい疾患やそれに伴う障害を理解し、よりよい援助について考える。

[授業全体の内容の概要]

高齢者の身体面、精神面の関連、身体機能と精神的機能の変化や特に社会的活動の可能性等を知り「老い」について理解を深める。

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

・人間の発達と老化を理解して高齢者の気持ちを踏まえた介護福祉が実践できるようになる。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

１　オリエンテーション（授業の目的、内容などについて説明）
２　発達とは・・・・スキャモンの発達曲線を理解し、生涯発達の理論を説明できる。
３　発達段階と発達課題・・・・エリクソン、ハヴィガーストなどの発達課題を説明できる。
４　胎生期、乳児期の発達的特徴・・・感覚運動期（ピアジェの発達段階）の特徴を学ぶ。
５　幼児期の発達的特徴①・・・前操作期（ピアジェの発達段階）の特徴を学ぶ。
６　幼児期の発達的特徴②・・・愛着理論を理解し、こどもの発達について論じることができる。
７　児童期の発達的特徴・・・具体的操作期（ピアジェの発達段階）の特徴について学ぶ。
８　青年期の発達的特徴・・・形式的操作期（ピアジェの発達段階）の特徴について学ぶ。
９　成人期の発達的特徴・・・中年の危機について学ぶ。
１０　老年期の発達的特徴・・・・老化とは（老性自覚など）、喪失と別れなどの老年期のテーマを学ぶ。
１１　老年期の発達課題・・・・エリクソン、ハヴィガースト、バルテス他の理論から老年期を考える。
１２　老化に伴う記憶機能の変化と心理的影響・・・短期記憶、長期記憶、エピソード記憶への影響を説明できる。
１３　老化に伴うパーソナリティの変化・・・ライチャード、ビックファイブ、マズロー、適応機制などへの影響を説明できる。
１４　社会における老化理論・・・・活動理論、離脱理論、社会情動的選択性理論などの比較ができる。
１５　老化にともなう身体的な変化と生活への影響①
１６　老化にともなう身体的な変化と生活への影響②
１７　健康長寿に向けての健康
１８　高齢者の症状・疾患の特徴
１９　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点①・・・骨格系・筋系
２０　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点②・・・骨格系・筋系
２１　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点③・・・脳・神経系
２２　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点④・・・皮膚・感覚器系
２３　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点⑤・・・循環器・呼吸器系
２４　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点⑥・・・消化器・腎 泌尿器系
２５　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点⑦・・・内分泌・代謝系
２６　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点⑧・・・歯・口腔疾患・がん
２７　高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点⑨・・・感染症・精神疾患・その他
２８　保健医療職との連携
２９　まとめ・国試対策①

３０　まとめ・国試対策② 試験（ペーパーテスト）	
[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士養成講座　発達と老化の理解　中央法規	[単位認定の方法及び基準] 試験（中間・期末）の点数に加え、授業への参加状況を総合し評価する。尚、その配分は試験を９割、その他を１割とする。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
認知症の理解	2年　前期・後期	講　　義	60（4）	30

担当教員	実務経験	実務経験の概要
梶　政利 平間 千絵	有 無	梶：平成11年12月～平成16年3月デイサービスセンター　管理者 平成16年4月～令和4年2月グループホーム管理者・ケアマネ 有料老人ホーム管理者 令和4年6月～　特別養護老人ホーム　看護師

[授業の目的・ねらい]

認知症の本質や認知症の人の心理状態、認知症特有の症状やケア、認知症を取り巻く社会環境などを正しく理解し、認知症に対する適切な全人的ケアを提供できるような知識を得る。

認知症に関する基礎的知識を習得すると共に、認知症の人の体験や、意思表示が困難な特性を理解する。

そこから、認知症の人、その家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点を習得する。

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

・「認知症の人が笑顔で楽しく生きられる」ための支援方法の正しい知識が得られる。
・認知症に関する主な疾病について理解し、分類することができる。
・認知症の症状を理解し、知症の方に寄り添ったケアの実践ができる。
・認知症を取り巻く情勢を理解し、福祉従事者としてそれらの知識を活用できる。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数（梶 担当分）

1	認知症の基礎的理解①	認知症と何か、認知症の概念について学ぶ。
2	認知症の基礎的理解②	脳のしくみ、認知症の人の心理
3	認知症の症状・診断・治療・予防①	中核症状の理解　-1、2
4	認知症の症状・診断・治療・予防②	生活障害の理解
5	認知症の症状・診断・治療・予防③	ＢＰＳＤの理解　-1、2
6	認知症の症状・診断・治療・予防④	認知症の診断と重症度
7	認知症の症状・診断・治療・予防⑤	認知症の原因疾患と症状・生活障害-1、2
8	認知症の症状・診断・治療・予防⑥	認知症の治療薬、認知症の予防
9	障害をかかえて生きる事への支援①	認知症を取り巻く状況
10	障害をかかえて生きる事への支援②	認知症ケアの理念と視点
11	障害をかかえて生きる事への支援③	認知症当事者の視点からみえるもの
12	認知症ケアの実際①	パーソンセンタードケア
13	認知症ケアの実際②	認知症の理解と認知症の特性をふまえたアセスメントツール-1、2
14	認知症ケアの実際③	認知症の人とのコミュニケーション-1、2
15	認知症ケアの実際④	認知症の人へのケア-1、2
16	認知症ケアの実際⑤	認知症の人への様々なアプローチ
17	認知症ケアの実際⑥	認知症の人の終末期医療と介護、環境づくり
18	介護者支援①	家族への支援、介護福祉職への支援
19	認知症の人の地域生活支援①	制度、サービス、機関、地域づくり、多職種連携と協同
20	振り返り	

後期試験

コマ数（平間担当分）

21　認知症のある高齢者の現状と今後　～認知症とは何か～
22　中核症状を理解し、認知症の症状の特徴を学ぶ。
23　生活障害を理解し、中核症状との違いを区別できる。
24　行動・心理症状（BPSD）を理解し、認知症の症状の多様性を学ぶ。
25　認知症の原因疾患と症状①　アルツハイマー型認知症と血管性認知症の比較ができる。
26　認知症の原因疾患と症状②　レビー小体型認知症・前頭側頭型認知症の特徴的な症状を説明できる。
27　認知症の原因疾患と症状③　治療可能な認知症、その他の認知症について学ぶ。
28　認知症の診断と重症度判定の方法を学び、その区別ができる。
29　認知症の方への関わりの方法を知り、それを実践できる。
30　地域包括ケアシステムにおける認知症ケアを学び、制度を活用できる。

学期末に試験を実施する

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
介護福祉士養成講座　認知症の理解　中央法規 見て覚える！介護福祉士国試ナビ　中央法規	期末試験（90%）、授業への参加状況（10%）で総合的に評価する。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
障害者福祉論	2年　前期・後期	講　　義	60（2）	30

担当教員	実務経験	実務経験の概要
蒔田明嗣（第1部担当） 黒田英敏（第2部担当）	有	蒔田：聴覚障害者職員への相談業務、手話通訳、家庭支援、情報提供 障害を持つ職員（ろう、脳性麻痺後遺症など）と共に働くための心構え、（人権思想、心理臨床、障害の特性など）健聴職員への障害理解の啓発・研修 黒田：資格障害者施設において、社会福祉士として障害者福祉の実務に携わっていた。

[授業の目的・ねらい]

障害のある人の心理や身体機能に関する基礎的知識を習得するとともに障害のある人の体験を理解し、本人のみならず家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点を習得する。

[授業全体の内容の概要]

① 障害の基礎的理解②障害のある人の生活の理解（障害別で医学的側面を含む）
③家族への支援④連携と協働、さらに、⑤手話や⑥点字を実際に学び障害者の人の心理・生活を理解する

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

①障害の基礎的知識を理解する
②障害のある人の生活を障害別に医学的側面を含めて理解する
③家族への支援について理解する
④地域におけるサポート体制について理解する
⑤手話による基本的日常会話を修得する
⑥点字によるコミュニケーションを修得する

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

第1部

【障害の基礎的理解】

1　障害の概念
2　障害者福祉の基本理念

【障害のある人の生活の理解Ⅰ】

【①聴覚・言語障害】

1　聴覚に障害のある人への理解と知識の習得
・聴覚障害とは何か。用語の理解（難聴者、ろう者、中途失聴者など）
・聴覚障害者が社会生活の中で困難を感じている場面の紹介　他
・聴覚障害者の日常生活（ビデオなどを使用し、実際の場面を学ぶ）

2　聴覚障害者の心理臨床の理解
・聴覚障害が人格形成に及ぼす影響（言葉の習得、特性など）
・聴覚障害児から成人聴覚障害者、高齢聴覚障害者など、それぞれのライフステージでの臨床例をとりあげ、
聴覚障害者の心の問題を学ぶ。他

3　聴覚障害の病因と治療の理解
・聴覚障害の発生の病因、症状、治療法の理解
・聴覚器の仕組みと音の伝わり方　他

4　聴覚障害者のコミュニケーション手段の習得
・耳の聞こえない人とのコミュニケーション手段を学ぶ（手話、口話、筆談、補聴器、活用など）
・様々な聴覚障害者用福祉機器の紹介
・ナチュラル・アプローチ法での手話の演習を通し、コミュニケーションの大切さ、困難さを実感する。

5．聴覚障害者福祉の制度、運動、教育の理解
・聴覚障害者の社会活動、ろう教育など実際の場面を、ビデオなどを通して学ぶ。

・聴覚障害者の福祉制度紹介と理解
・手話通訳者、ろうあ相談員、手話サークル、要約筆記サークルなど聴覚障害者を支える人たちの理解
【②知的障害・③重症心身障害】
1　知的障害のある人への理解（心理的・医学的理解と介護上の留意点）
2　重症心身障害のある人への理解（心理的・医学的理解と介護上の留意点）
【家族への支援】
1　家族支援の視点
2　家族支援の実践的な取組について

第２部
【障害のある人の生活の理解Ⅱ】
【①視覚障害】
1　視覚障害を理解しよう
　～　目の構造と障害・疾病の理解　～
2　視覚障害者への生活を理解しよう
3　移動介助を習得しよう
　～　屋内屋外などでの移動介助の基本技術　～
4　点字を習得しよう
　～　点字を中心にコミュニケーション方法の習得　～
【②肢体不自由】
1　肢体不自由の人への理解（心理的・医学的理解と介護上の留意点）
【③精神障害・④高次脳機能障害・⑤発達障害】
1　精神障害・高次脳機能障害・発達障害のある人への理解（心理的・医学的理解と介護上の留意点）
【⑥内部障害・⑦難病患者】
1　内部障害・難病患者の人への理解（心理的・医学的理解と介護上の留意点）
【連携と協働　地域におけるサポート体制について】
1　保健医療職種との連携
2　行政、関係機関との連携

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
「介護福祉士養成講座　障害の理解」 中央法規 蒔田：手話学習用のプリント、聴覚障害者福祉に関する資料を毎演習時に配布する 黒田：「点訳のしおり」　日本点字図書館 なお別に「兼帯用点字器」を教材として配布する	[聴覚障害分野] 課題・レポート（７０％）と授業態度（３０％）で評価する。 [視覚障害分野] 試験と平常点（学習態度等）を総合し評価する。 両分野の評点をそれぞれ５０点満点とし、合わせて評価する。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
医学・医療の知識	1年後期　2年前期	講　　義	６０（４）	３０

担当教員	実務経験	実務経験の概要
大坪陽子	有	看護師として５年余病棟、外来、在宅看護等の臨床経験、専門学校、大学の看護学部における教育経験があり、2021年～診療所の保健師（現在）

[授業の目的・ねらい]

介護・福祉の実践に関連する基本的な医学的知識を身に着ける

[授業全体の内容の概要]

人体の構造と機能、介護・福祉に関連する主な疾患に関する講義・ワークショップを行う。

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

国家試験で求められる医学的知識のレベルを感覚的に把握することができる
医学的知識を習得するための勉強方法を習得・実践できる
高齢者医療における重要なキーワードを２つ以上挙げ、自分の言葉で説明できる

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

１　医事法制と高齢者の主な死因
３～６　教科書を用いた壁新聞づくりとプチ講義の準備(グループワーク)
７～１０　学生によるプチ講義と講師による補足
１１　脳血管障害p98-99
１２　悪性腫瘍 p106-109
１３　嚥下と誤嚥性肺炎p114-115
１４　復習
１５　中間テスト
１６　中間テスト解説
１７-２９　国家試験過去問チャレンジ
３０　まとめ

[使用テキスト・参考文献]

弘文堂

介護福祉のための医学

[単位認定の方法及び基準]

期末試験による。期末テストが基準に達しない場合は中間テストの得点を考慮する。

１００～８０点　優　　６９～６０点　可
７９～７０点　良　　５９点以下　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
医療的ケアⅠ	1年後期・2年生前期	講義	78（5）	38

担当教員	実務経験	実務経験の概要
石﨑　美幸	有	石﨑：看護師として総合病院及びクリニックの病棟、手術室、外来業務及び在宅医療に携わっていた。
平田　留美	有	平田：看護師として病院及びクリニックの病棟、外来、手術室で看護業務に携わっていた。

[授業の目的・ねらい]

・医療職との連携のもとで医療的ケアを安全・適切に実施できるように必要な知識、技術を習得する。

[授業全体の内容の概要]

・医療的ケアに関連する法制度や倫理、医療関係者との連携や関連職種とその役割を理解し、医療的ケア実施における基礎知識をふまえ、安全、適切な実施手順のもと、喀痰吸引、経管栄養、救急蘇生法について学習する。

・医療的ケアの実施に伴い必要となる健康状態の把握とその観察方法、清潔行為、感染予防、滅菌、消毒について学習する。

[授業終了時の達成課題（到達目標）]

・医療的ケア実施の基礎を理解する。

・喀痰吸引の基礎的知識や実施手順について理解する。

・経管栄養の基礎的知識や実施手順について理解する。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

1　医療的ケアとは
2　法制度について
3　安全な療養生活
4　救急蘇生①→救急蘇生法を理解する。
5　救急蘇生②→救急蘇生法を体験する。
6　清潔保持と感染予防→マスクや使い捨てガウンの装着方法や捨て方を体験する。
7　療養環境の清潔、消毒法→滅菌と消毒の違いを理解する。
8　健康状態の把握（バイタルサイン）
9　急変状態について
10　呼吸のしくみとはたらき
11　いつもと違う呼吸状態
12　喀痰吸引とは
13　人口呼吸器と吸引
14　子どもの吸引について
15　利用者や家族の気持ちと対応、説明と同意
16　呼吸器系の感染と予防
17　喀痰吸引により生じる危険、事後の安全確認
18　急変・事故発生時の対応と事前対策
19　器具・器材とそのしくみ、清潔の保持
20　喀痰吸引に伴うケア
21　報告・記録
22　消化器系のしくみとはたらき
23　咀嚼と嚥下のしくみ
24　消化・吸収と消化器系の症状
25　経管栄養とは
26　注入する内容に関する知識
27　経管栄養実施上の留意点

コマ数	
２８	子どもの経管栄養
２９	利用者や家族の気持ちと対応、説明と同意
３０	経管栄養に関係する感染と予防
３１	経管栄養により生じる危険、注入後の安全確認
３２	急変・事故発生時の対応と事前対策
３３	器具・器材とそのしくみ、清潔の保持
３４	経管栄養の技術と留意点
３５	経管栄養に必要なケア
３６	報告・記録
３７	喀痰吸引実施手順（口腔内・鼻腔内・気管カニューレ内部）
３８	経管栄養実施手順（胃ろう・腸ろう・半固形栄養・経鼻経管栄養）
	試験

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
介護福祉士養成講座１５巻　中央法規	学期末の試験（ペーパー試験）と平常点（授業への参加状況）を総合し評価する。尚、その配分は７：３を基準とする。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
医療的ケアⅡ	2年　後期	演習	３０（1）	１５

担当教員	実務経験	実務経験の概要
石﨑　美幸	有	石﨑：看護師として総合病院及びクリニックの病棟、手術室、外来業務及び在宅医療に携わっていた。
平田　留美	有	平田：看護師として病院及びクリニックの病棟、外来、手術室で看護業務に携わっていた。

[授業の目的・ねらい]

・医療職との連携のもとで医療的ケアを安全・適切に実施できるように必要な知識、技術を習得する。

[授業全体の内容の概要]

・医療的ケアに関連する法制度や倫理、医療関係者との連携や関連職種とその役割を理解し、医療的ケア実施における基礎知識をふまえ、安全、適切な実施手順のもと、喀痰吸引、経管栄養、救急蘇生法について学習する。

・医療的ケアの実施に伴い必要となる健康状態の把握とその観察方法、清潔行為、感染予防、滅菌、消毒について学習する。

[授業終了時の達成課題（到達目標）]

・喀痰吸引の確実な手技が習得できる。

・経管栄養の確実な手技が習得できる。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

1　口腔内喀痰吸引の実施手順と留意点について
2　口腔内喀痰吸引の実際
3　口腔内喀痰吸引の実際
4　鼻腔内喀痰吸引の実施手順と留意点について
5　鼻腔内喀痰吸引の実際
6　鼻腔内喀痰吸引の実際
7　気管カニューレ内部喀痰吸引の実施手順と留意点について
8　気管カニューレ内部喀痰吸引の実際
9　気管カニューレ内部喀痰吸引の実際
10　胃ろう経管栄養の実施手順と留意点について
11　胃ろう経管栄養の実際
12　胃ろう経管栄養の実際
13　経鼻経管栄養の実施手順と留意点について
14　経鼻経管栄養の実際
15　経鼻経管栄養の実際
試験

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
介護福祉士養成講座１５巻　中央法規	各単元の実技試験、平常点（演習の参加状況）を総合し評価する。その配分は８：２を基準とする。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名	配当学年・時期	授業形態	時間数（単位数）	授業回数
試験対策講座	２年前期後期	講義	４５（2）	２３
担当教員 専任教員	実務経験	実務経験の概要		

[授業の目的・ねらい]

介護福祉士国家試験及び学力評価試験に合格できる知識を習得する。

[授業全体の内容の概要]

小テスト・模擬試験を通し、合格基準に達する実力を育てる。

[授業修了時の達成課題（到達目標）]

・学力評価試験に合格できる
・介護福祉士国家試験に合格できる
・介護福祉士として必要な基礎知識と応用力を身につけ、それを実践できる。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

小テスト・模擬試験をつみ重ねることで、個人の課題を見つけ、
苦手分野を克服できるよう個別指導を行う。

学生で試験対策委員を組織し、委員を中心としたグループワークに取り組み、
クラス全体の実力の向上を目指す。

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士　国試ナビ　2026
介護福祉士国家試験　模擬問題集　2026
中央法規

[単位認定の方法及び基準]

模擬試験の結果（9割）、授業への取り組みの姿勢（1割）を総合し評価する。

１００～８０点　優　　６９～６０点　可
７９～７０点　良　　５９点以下　不可

授　業　概　要（シラバス）

授業の科目名 地域支援活動Ⅰ	配当学年・時期 1年　前後期・2年前期	授業形態 演習	時間数（単位数） １３５（4）	授業回数 ６０
担当教員 専任教員	実務経験	実務経験の概要		

[授業の目的・ねらい]

地域における高齢者や障がい者の方々と直接的・主体的なふれあいを通し、地域福祉の実践力を身につける。

[授業全体の内容概]

地域生活支援センターを拠点とし、東川町や旭川市の福祉施設に出掛けていき、アクティビティ（「作業療法」「耕生活動」「動物介在療法」「介護予防」）等の地域支援活動を実践する。

[授業終了時の達成課題(到達目標)]

・地域支援活動の実践から、福祉従事者として必要な地域支援に関わる知識・技術を学び、それを実践できる。

・グループワークを通し、主体性と協調性、チームワークを学び、連携や協働ができる。

[授業計画及び各回のテーマ・内容・授業方法]

１年前期

- ・地域支援活動を実践するにあたっての基礎を学ぶ
- ・地域支援の必要性
- ・地域の現状を理解する
- ・地域を支援する基本について学ぶ
  - ・地域支援の原則
  - ・地域支援の方法
  - ・地域支援の過程と評価

１年後期・２年前期

グループに分かれての実践から地域支援を学ぶ

※１クラスを活動グループに分かれて展開する。活動内容により１グループを10名程度で構成し、それぞれのグループを教員１～２名が担当する。

活動内容（アクティビティ）

以下の様々なアクティビティをとおして地域の方との交流を図り、地域生活を支援する活動を学ぶ。

[グループ活動例]

◎動物介在療法（ポニーの飼育と環境整備）、施設訪問

◎地域の高齢者との交流・ボランティア、作業療法（ドライフラワー）、耕生活動（花栽培・園芸療法）

◎地域福祉のニーズを学ぶ（グループホームの訪問）、作業療法（バルーンアート）

◎地域福祉のニーズを学ぶ（施設訪問）、作業療法（アクティビティ・レクリエーション）
介護予防活動（介護予防体操考案）

※なお、これらの活動のまとめとして、地域支援活動Ⅱにおいては、地域支援活動発表会にて活動を発表する。

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準] 活動成果と活動態度を考慮し、目標達成度によって評価する。 １００～８０点　優　　６９～６０点　可 ７９～７０点　良　　５９点以下　不可